

シンポジウム「ウクライナ問題が日本の生活に与える影響—SDGsの観点から—」

日本大学国際関係学部
生活科学研究所長 伊坂 裕子

——「敵」をやっつけるのが戦争ですが、壊れるのは自然であり、失われるのは生活であり、死ぬのは人間です。——ⁱ

これは、長田弘『すべてきみに宛てた手紙』に収録された「手紙36——戦争の言葉」の一部です。この言葉の通り、戦争は自然を壊し、私たちから生命や生活を奪っていきます。ここでは言葉は意味を失うと長田は言います。

私たち生活科学研究所では2021年からSDGs（持続可能開発目標）をテーマとしてシンポジウムを実施していますが、戦争は持続可能な世界と対極にあります。SDGsの目標16は「平和と公正」です。2022年2月に始まったロシアのウクライナへの軍事侵攻は、安全保障や世界政治の観点から語られることが多いですが、このシンポジウムでは、私たちの生活に直結する身近な問題を通して、ウクライナ問題を考えることを目的にしました。

元駐ウクライナ特命全権大使で日本大学国際関係学部元教授、黒川祐次先生によるウクライナ問題の歴史的背景についての基調講演に続き、本学教員の研究発表を行いました。研究発表では、エネルギーや食糧市場への影響、ポピュラーカルチャー実践による問題解決のヒント、また、ウクライナから三島市に避難していらっしゃるネジェリコ・マリーナさんご一家の体験をお聞きしながら、日本の難民問題について考えました。最後にディスカッションを行い、ウクライナ問題を身近に感じることで、語り続けることの重要性を共有しました。

冒頭に紹介した長田は、戦争には3つの言葉があると言っています。戦争前の自己本位の正当化、戦争中の意味を失った言葉、そして戦争後は戦争に勝った側は「戦争は解決である」と信じることで、敗れた側は「戦争は解決ではない」と思い知ることです。そして、昭和の戦争に敗れた日本が手にしてきたのは、「戦争は解決ではない」と思い知った言葉だと言います。言葉の持つ普遍的な力を信じて、このシンポジウムがウクライナ問題を身近なものとして、考えるきっかけとなれば幸いです。

ⁱ 長田弘 (2022). 手紙36—戦争の言葉 すべてきみに宛てた手紙 筑摩書房 pp.137-139.